10年後も20年後も安心して暮らすことができる環境をつくるために

10年後も20年後も安心して暮らせる環境にしたいと考えた九里さんが最初に取り組んだのは、行政も巻き込んでの認知症徘徊者の捜索訓練でした。成果はチーム永源寺で発表を行いました。

他にも、高野町の人口は４００人、そのうち高齢者は１２０人。認知症社会が拡大すると医療や介護、福祉の人材だけでは対応できなくなる、という思いから認知症サポーターキャラバンに参加しました。現在はその指導的立場となるキャラバンメイトも取得しています。

その後も、地域の有志でつくった会「おいでえな高野」を母体として、様々な取り組みを続けています。他にも人気が衰退して草が伸び放題になっていたグラウンドゴルフ場の整備や管理をはじめ、彦根藩井伊家に由来する彦根から永源寺までの高野道を検証するツアーの計画。また、大本山永源寺の精進料理を学ぶ会、地域の高齢者が歩いて参加できる歌声喫茶も地域に根付いてきました。

お話を伺った九里 重義さん

「自分が楽しいと思うことをやれば、賛同者も増えます。この活動はサラリーマン時代は顧みることのできなかった地域への恩返しでもあります」と語る九里さん。最後に「自分自身も認知症にならないで１００歳を迎えることができる元気な高齢者を目指します」と語ってもらいました。

お互いさんの気持ちで助け合えるまちに

この方にお聞きしました！

生活支援サポーター 絆
代表 川嶋 冨夫さんとメンバーのみなさん

永源寺地区では、花戸さんを中心とした医療・介護の専門職による『チーム永源寺』の頑張りがありますが、制度やサービスだけで支え切れないニーズも増えています。そんな中、見守りも兼ねたお話し相手やゴミ出しをはじめ、買い物や金融機関などちょっとした先への送迎など、日常の何気ない「助けて！」に応えているのが、住民有志による「生活支援サポーター絆」の皆さんです。

「絆」が誕生したのは２０１２年１月。市社協が実施した「生活支援サポーター養成講座」を川嶋さんはじめメンバーが受講。支え切れていない困りごとが永源寺にもあること、その中には住民でもできることがあるなど、多くの気づきを元に「永源寺のために自分たちに何ができるか」を話し合い、およそ1年かけて結成しました。また、依頼者の気持ちに寄り添うといったサポートの心構えをはじめ、依頼者の気持ちの負担を軽減するということで、1時間に１００円の協力金をいただくこと、地区ごとに活動の調整役を配置するなど、話し合ってきたことを「活動の手引き」としてまとめています。

月に一度の例会で課題を持ち寄り、みんなで検討

「本人さんの持っているつながりを切らず、絆としてどこまで関わるか」など、活動には悩みも多くあります。しかし、例会でメンバー同士が、想いも悩みも共有することで、サポーター自身がムリなく楽しく活動ができる、と例会の必要性を語る声も多くありました。メンバーの方からは、「感謝されるだけでなく、人生経験の豊富な人から、色んなことを教えてもらえる」といった想いもお聞きしました。

お話を伺った川嶋 冨夫さん

絆の結成前から市社協も関わっています。「専門職とのつながり方や役割分担や本人さんの体調面など、絆だけではわからないこともあります。一方、専門職側にも規定のサービスでは対応できないことへの悩みがあります。それをつなぐのが私たち社協の役割です。」と話していただきました。

最後に代表の川嶋さんは「無理してやるのはやめよう、やる側も楽しくやれることが当初からのモットー。これからもサポーター同士が協力しながら続けていきたい」と語っていただきました。

お話を伺った「絆」のみなさんの例会の様子